

2019年7月1日

博士学位審査 論文審査報告書（課程内）

大学名 早稲田大学
研究科名 大学院人間科学研究科
申請者氏名 灰谷 知純
学位の種類 博士（人間科学）
論文題目（和文） 吃音のある成人における注意・感情制御に着目した吃音症状・社交不安の維持メカニズムの検討
論文題目（英文） Investigation of the maintenance of stuttering and social anxiety in terms of attentional and emotional regulation in adults who stutter

公開審査会

実施年月日・時間 2019年6月24日・11:00-12:00

実施場所 早稲田大学 所沢キャンパス 100号館 第一会議室

論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位（分野）	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・教授	熊野 宏昭	博士（医学）	東京大学	臨床心理学
副査	早稲田大学・教授	根建 金男	博士（人間科学）	早稲田大学	臨床心理学
副査	早稲田大学・教授	嶋田 洋徳	博士（人間科学）	早稲田大学	臨床心理学

論文審査委員会は、灰谷知純氏による博士学位論文「吃音のある成人における注意・感情制御に着目した吃音症状・社交不安の維持メカニズムの検討」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について30分間の発表があった。

1 公開審査会における質疑応答の概要

申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。

- 1.1 **コメント：**中間報告会で指摘された事項、特に、研究全体の論理的展開、それに基づく結果と考察も丁寧に説明されていた。プレゼンテーションも明瞭であった。
- 1.2 **質問：**発達性か獲得性かといった吃音の発症要因に関係なく、成人になって困難感がある人を対象にしている。そのことが結果に影響している可能性はないのか。
回答：最近の研究では吃音による二次的な不安については、発症要因による差はあまりないとされている。しかし、吃音症状と不安などのネガティブ感情との間の関連については、発症要因による差が認められる可能性がある。
- 1.3 **質問：**研究3のネットワーク分析において、「生活の質の低下」が社交不安やコミュニケーションの困難ではなく、吃音に関する困難と関連している。吃音が生活

の質を左右しているように見え、後の結論と矛盾しているように感じられる。

回答：「生活の質の低下」を測定する尺度が、全般的な生活の質の低下ではなく、吃音による生活の質の低下を測定するものであったことによる結果と考える。

- 1.4 **質問：**従来の認知行動療法では、吃音症状を抑えることを目標とする。アクセプタンス&コミットメント・セラピーなどでは、吃音症状とは関係なく生活することを目標とする。研究4のモデルから言えることはどのようなことか。

回答：吃音症状を変える介入法とは別に、コミュニケーションへの集中を高めればコミュニケーションの満足度は高まることが想定される。

- 1.5 **質問：**研究4で用いた即時的評価法（EMA）と質問紙という測定方法の違いについてどのように考えるか。

回答：質問紙には想起バイアスが伴うが、一般的な治療効果の測定などには有用とされてきた。両者は同じ概念の異なった側面を測定している可能性がある。

- 1.6 **質問：**EMAで繰り返し吃音について尋ねることで、吃音に対する注意が高まることが限界になるのではないか。

回答：2週間の間で吃音症状は低くなり、コミュニケーションへの集中は高まる傾向にあった。繰り返し測定することで、変数間の関連性も変わる可能性がある。

- 1.7 **質問：**研究の結果を受けて、どのような支援方法が考えられるか。

回答：1.4で答えたことに加えて、アクセプタンスを強調した瞑想訓練が、ポジティブな感情の上昇とネガティブ感情の低下につながるとする研究があるため、吃音に対しても今後検討を進めたい。

2 公開審査会で出された修正要求の概要

- 2.1 博士学位論文に対して、以下の修正要求が出された。

2.1.1 第1章のタイトルを、要約的な内容に変更すること

2.1.2 倫理委員会の承認番号を記載すること。

2.1.3 発症要因や背景要因などの被験者特性が解析結果に与える影響について、考察を深めること。

2.1.4 本研究の結果から推奨される介入の方向性について、対象者特性による適応の違いも含め考察に加えること。

- 2.2 修正要求の各項目について、本論文最終版では以下の通りの修正が施され、修正要求を満たしていると判断された。

2.2.1 第1章のタイトルを、「吃音のある成人に対する治療の展開と注意・感情制御への着目」に変更した。

2.2.2 研究2、3、4のそれぞれについて、研究実施機関の倫理審査委員会による承認番号を「倫理的配慮」の項目に追記した。

2.2.3 研究4において、吃音の発症年齢と発症時の状況についての一覧表を掲載し、12歳以上で吃音が発症した、心因性吃音が疑われうるものが含まれる5名に対して、別途レベル1（個人内での反復測定データを用いる）での分析を行い、その結果を踏まえた考察を追記した。

2.2.4 研究4における当事者団体への参加の有無による解析結果と、2.2.3の修正を踏まえ、被験者特性に応じた介入の方向性について、総合考察に追記した。

3 本論文の評価

- 3.1 本論文の研究目的の明確性・妥当性：本論文の研究目的は、神経心理学的な注意機能（発話に直接的には関連しない）、及び日常生活場面での注意の機能や、注意を含む感情制御（発話に直接的に関連しうる）に着目し、困難を持つ吃音のある成人に対する心理学的支援についての臨床的示唆を得ることであった。さらに、吃音のある成人において困難となりやすい社交不安の特徴を明らかにすることも目的に含まれていた。前者は、吃音のある成人における注意・感情制御の機能を明らかにするという点で明確であり、効果的な心理学的支援を考察するにあたって妥当な目的である。後者についても研究目的は明確であり、前者の目的を達成するために必要であるため、妥当な目的の設定であると言える。
- 3.2 本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：本論文では、神経心理学的な注意機能を検討するための実験研究、社交不安と臨床症状との関連を検討するための調査研究、日常生活の社会的交流場面における諸変数間の関連を検討する EMA 研究を計画し、いずれも心理学および関連領域の先行研究の手法を踏襲した明確かつ妥当な方法論およびデータ解析によって結論が導かれている。なお、早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理委員会」（研究 1: 2012-271）、及び国立障害者リハビリテーションセンター「倫理審査委員会」（研究 2: 30-112、研究 3: 30-114、研究 4: 29-110）の承認を得ており、研究 1、4 の前にはインフォームドコンセント、研究 2、3 については Web ページでのオプトアウトが実施され、倫理的に適切な配慮がなされている。
- 3.3 本論文の成果の明確性・妥当性：本論文の成果は、吃音のある成人において発話に関連しない注意機能によって臨床的問題を説明することはできない一方、発話に関連する注意・感情制御は臨床的困難を説明することができ、ポジティブ感情/ネガティブ感情と、注意・感情制御との間の関連を実証したことである。さらに、吃音のある成人の社交不安が、発話場面で高まり、コミュニケーション困難との直接的な関連が強いという結果も得られている。これらのことは論文内において明確に述べられており、臨床的にも妥当な知見である。
- 3.4 本論文の独創性・新規性：本論文は、以下の点において独創的である。
 - 3.4.1 先行研究で、吃音のある子どもでは神経心理学的な注意機能と吃音症状が関連することが示されていたが、吃音のある成人では神経心理学的な注意機能は吃音症状と関連しないことを示した点には、新規性がある（研究 1）。
 - 3.4.2 吃音のある成人の社交不安を測定する LSAS の因子構造は、臨床サンプルとは異なっており、発話場面で特異的に高まりうることを示した点は、独創的で新規性がある（研究 2）。さらに、LSAS の尺度得点がコミュニケーション困難との直接的な関連が強いことを示した点にも、新規性がある（研究 3）。
 - 3.4.3 先行研究で示されていないポジティブ・ネガティブ感情と注意・感情制御と

の間の関連について、吃音のある成人において、感情の影響を考慮して注意・感情制御の機能を明らかにした研究 4 は、高い独創的と新規性を有する。

- 3.5 本論文の学術的意義・社会的意義：本論文は以下の点において学術的・社会的意義がある。
- 3.5.1 吃音のある成人においては、吃音のある子どもとは異なり、神経心理学的な注意機能が吃音症状と十分に関連しないことを示し、成人と子どもとの間で異なる吃音症状の維持メカニズムが想定されることを示した点。
 - 3.5.2 吃音のある成人の社交不安は、（吃音のない）不安症のある人の社交不安とは特徴が異なることを示した点。また、社交不安はコミュニケーションの困難と直接的な関連が強いことを実証的に示した点。
 - 3.5.3 ポジティブ感情はコミュニケーションへの集中と、ネガティブ感情は吃音に対する対処と関連すること、また、コミュニケーションへの集中はその満足度と、吃音に注意が奪われることは自覚的吃音症状と関連することを示し、日常生活場面における問題の維持メカニズムを具体的かつ実証的に示した点。
- 3.6 本論文の人間科学に対する貢献：本論文は、以下の点において、人間科学に対する貢献がある。
- 3.6.1 神経心理学的/臨床心理学的観点から、吃音のある成人の問題維持のメカニズムを探索した本論文は、吃音のある成人の心身の健康の向上に寄与しうる。
 - 3.6.2 神経心理学/臨床心理学の観点から吃音症状に関する考察を行うことは、リハビリテーション科学や発話言語病理学を含む学際的发展につながる。
- 3.7 不適切な引用の有無について：本論文について類似度を確認したうえで精査したところ、不適切な引用はないと判断した。

- 4 学位論文申請要件を満たす業績（予備審査で認められた業績）および本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。
- ・灰谷 知純・熊野 宏昭（2016）. 吃音者における注意機能と吃症状、及びネガティブ感情との関連 音声言語医学, 57, 217-226. doi:10.5112/jjlp.57.217
 - ・灰谷 知純・佐々木 淳・熊野 宏昭（2015）. 短期間のマインドフルネスのエクササイズが吃音者の発話およびコミュニケーションに与える影響 コミュニケーション障害学, 32(1), 20-26.

5 結論

以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以上